大東亞文學の道　大東亞文學者大會席上にて[[1]](#footnote-1)

香山光郎

　我等大東亞民族は、我等の祖先の郷土たるアジを、米英の占據より取り返すべく光復の血戰を決行してゐる最中であるが、文化領域においても、祖先の東亞に歸る日が來た。それは即ち今日である。

　我等の祖先たちの意味した文學は、今日の英米流のそれとは違つたものであつた。英米流の文學が、寝そべつて、性的衝動を樂しみつゝ讀む物であるのに對して、我等の祖先の文學は、焼香端坐して天聲を聽くべく讀んだものである。孔子は『詩言志』、『詩三百一言以て之を蔽ふ思無邪』といはれ、また『興於詩、立於禮、成於樂』と宣はれたが、われらの祖先の意味する文學はそんなものであつた。戀愛や暴力や、その他人間の動物的本能を歌つた英米流の文學は、我等の祖先にいはしむれば、淫風に過ぎないであらう。周南、召南、雅頌の如きは英米人等の理解の閾外である。

　文學に於けるこの對蹠的な相違は、彼我の人生觀の相違から來たものである。凡そ文化はその民族の生命の分泌物である。我々東亞人は天孫を以て自任してゐる。日本民族の經典たる古事記はいふまでもないが、漢民族の經典たる書經も同様、天の命によるべきを説いて居る。堯舜や孔子の一貫した思想は天命を信ずることである。『人心惟危道心惟微唯精唯一允執厥中』こそ舜禹相傅の心法であるが、その人心とは、人間の動物的本能即ち利害苦樂を取捨する功利的な欲であり、道心こそは天命の性のことである。我等の組先は、この心法をもつて恐懼修省しつゝ天に近づくべく努力したのである。日本に於ける天照大御の神鏡は、これをもつとも端的に現はしたものだ。ビルマも天孫思想をもつてゐると聞いた。朝鮮も同様である。東亞諸民族はこの思想を共通にしてゐる。東亞諸民族の古き傅統たる祭祀や修行は一として、人間の動物的本能をば取押へて天命に順はんとする努力でないものはない。佛教だつて同様だ。東亞人が佛教を取入れこれを尊重した所以のものは、遏人慾而存天理の傳統的理想に合致したからだと思ふ。天命主義――これこそは東亞諸民族の人生觀の根抵をなすものである。

　しからば、天命とは何か。

書經によれば、堯の徳を讚へる最初の句が欽明である。欽、即ち敬ふことによつて天命を明かにする、それで堯は聖人になられたといふのである。佛教の見性成佛も同じ理だ。しからば欽ふことによつて明らかにされた天命の内容はどんなものか。經典にはまだ仁義といつたやうな抽象的なことばはつかつてゐないが、その用、即ち天命通りに行つて得た結果を、左の如く書いてゐる――

『克明俊徳。以親九族。九族既睦。平章百姓、百姓昭明。協和萬邦。黎民拾變時雍』

　人間が天に稟けたる本性、即ち天命、即ち道心を明らかにして、これを發揮すれば、百姓昭明、協和萬邦の理想が達せらるといふのであるが、これ即ち仁義で、佛教でいふところの慈悲である。この仁義の心が言行に現はれる現はれ方が禮であり、禮によつて練成し得たる力を徳といふのである。

　この仁義の根本思想の上に築かれたのが、我々東亞人の國家であり、文化であつた。この思想が政治に現はれゝば皇道、王道であり、個人に現はれゝは所謂允恭克讓となるのである。恭儉持己の恭であり、博愛及衆の讓である。この根本思想に據つて磨かれた我等の先人の性格は、その清明なることは鏡に譬へられ、その温和なること玉に譬へられ、そして惡に對しては嚴しき剱によつて象徴されるのである。その風格は、恭であり讓であり、重であり厚であり、その生活は安安として天命に順ふことである。そしてその修錬は誠と敬とによつての克己復禮である。

　飜つて英米人の人生觀を觀るに、正に我々とは反對であつて、彼等は人生の目標を幸福に置くのは且らく好いとして、彼等のいはゆる幸福とは人間の動物的本能の滿足を意味するのである。最大多數の最大幸幅といつたところで、詰るところ、動物本能の滿足だ。即ち我々の祖先がもつとも卑しめて、克服すべく努力しつゞけ來つた人心を彼等は人間の本性と見るのである。彼等が財の獲得をもつとも重要視する人生觀がこゝから生まれて來るのである。こゝに我と彼との調和出來ない根本的相違が存するのだ。

　或はいふであらう。英米人にも正義、自由といふことばが存すると。成程彼等はこの二つのことばを尚んでゐる。少くとも彼等が文明人としての體面を取繕ふための看板にして居る。しかし我等東亞人は、この二つのことばを誤解してゐるのだ。Justiceと正義[[2]](#footnote-2)、Freedom 又はLibertyと自由とが同じことを意味するやうに思つては大間違である。彼等の正義は　give and takeであり、eye for eyeである。精々just distributionだ。もっとも高く評價しても法律的正義の閾を出でないし、普通には商取引の概念に過ぎない。法的正義でさへ我等東亞人には物足りない。我等は正義といへばもつとも深い高い、道徳的、いなむしろ宗教的な感情をさへ伴ふものである。英米人の正義とは有體にいへば自分の獲得物を犯されないことだ。彼等は香港や馬來や緬甸やフイリツピンを取返すべく戰ふことを正義の戰と稱して居る。印度を解放せぬことが正義である。

　正義よりももつと有害に誤解されてゐるのは自由といふことばだ。自由といふことばは東亞に於いては完全に欲から離脱した狀態をいふのであつて、再び利害苦樂生死によつて左右されない聖賢志士的心境を指すのであるが、英米人は、倫理學に高尚な意味に使ふ場合でさへ他人に邪魔されないことを指すに過ぎない。自己の中心にあつて萬惡の根源をなす利己慾に束縛されることなき狀態を現はすのではない。況して、日常的用法に於いては、自由といへば對内的には自由貿易、即ち財と享樂の獲得の自由のことであり、對外的にはアングロ人の異民族搾取の自由を意味してゐる。天道の絶對性を看る眼を持たない彼等は功利主義や實用主義しか持合はせてゐない。我々の徳の極が絶對の天命、天道であるに對して、彼等の極は利害である。日本の古事記、中國の書經に對して、英米人の極を現はした經典はダーウインの進化論である。生存競爭が彼等の世界觀である。我等が神性に返るのを人生の目標とするのに對して彼等は動物本能の滿足を目標とするのである。ことむけ、徳化がわが東亞の國家目的であるに對して、征服が彼等の國家目的である。我々が謙讓忠信を以て異民族に對するに反して彼等は狩獵的暴力や釣魚者的巧詐を以て對する所以である。

　かやうに我等アジヤ人と英米人との人生觀國家觀が兩立出來ないものであるに拘はらず、過去約一世紀間東亞人は彼等に追隨することを餘儀なくされた。東亞人の或者は英米の學者に倣つて、我々の祖先の理想や文化をば考古學的興味を以て眺めることさへ敢えてしたのである。恰かも死滅したる原始民族の遺跡を探ぐる博物舘の吏員の如く、神聖なるわが祖先の經典や遺跡を探險したのである。

　今や東亞人は祖先の東亞に歸る日が來た。そして忘れられんとしたアジヤ人の祖先の共通の理想に基づいて、アジヤ共榮の世界を建てる時が來た。余はわが祖先たちの叫びを聞く、子等よアジヤに歸れと。そして恭しく天の明命を聞く。アジヤの光こそ人類を生存競爭の禽獣的慘劇より救ふものなるぞと。

　見よ。アジヤ人は同じ顔をしてゐるではないか。同じ人生觀即ち同じ魂を持つてゐるではないか。目前に共同の敵に對してゐるではないか。こゝに我らは、我らの子孫の將來の運命の一なるを悟るべきである。我等の祖先の精神を生かす道が唯一つある。そして我等の子孫の繁榮の道が唯一つある。それはアジヤを英米人の魔手より奪還して、アジヤ人同士の天孫的アジヤを作ることだ。アジヤの諸民族が銘々天命を基とした國家をなして、それらがお互に恭敬と謙讓と互助のアジヤ精神による隣組を作ることだ。

　今こそその機である。アジヤの土は已にわが同胞の忠血忠魂によつて淨められて居る。後はこれを守ればよいのだ。十億一心。わがアジヤを守り、二度とダーウイニズムの徒輩をして、わが神聖なるアジヤの土を汚さしむることがあつてはならない。彼等の分攻の手に乗つてはならない。敵のことばであるが合存分亡こそわれらアジヤ諸民族の運命なのだ。

　そして、このアジヤのよき地に、アジヤの天孫たちがアジヤの豊富な物産を驅使して吾等の祖先の理想、構想の、文化世界、平和世界を建設するならば、それはすばらしい世界であらう。阿彌陀經に描かれた極樂世界を實現することが出來ることだらう。撃石拊石、百獸率舞の平和境が現出すること必定である。百姓昭明、協和萬邦の日をこの眼で見ることと信ずる。

　文學の道は自ら明らかである。アジヤの民よ。アジヤに歸れ。アジヤ人の運命は一なり。人類救済の光はアジヤより發す。この事實を、この理想を、この感情を、われわれ文學者は筆によつて、舌によつて、わが同胞等に叫ぶのだ。これ即ち大東亞文學であり、われわれの使命である。

-

1. 『國民文學』1945年1月号。前年11月に南京で開催された大東亞文学者大會での発言である。 [↑](#footnote-ref-1)
2. Justiceは原文ではfusticeと誤植されている。 [↑](#footnote-ref-2)